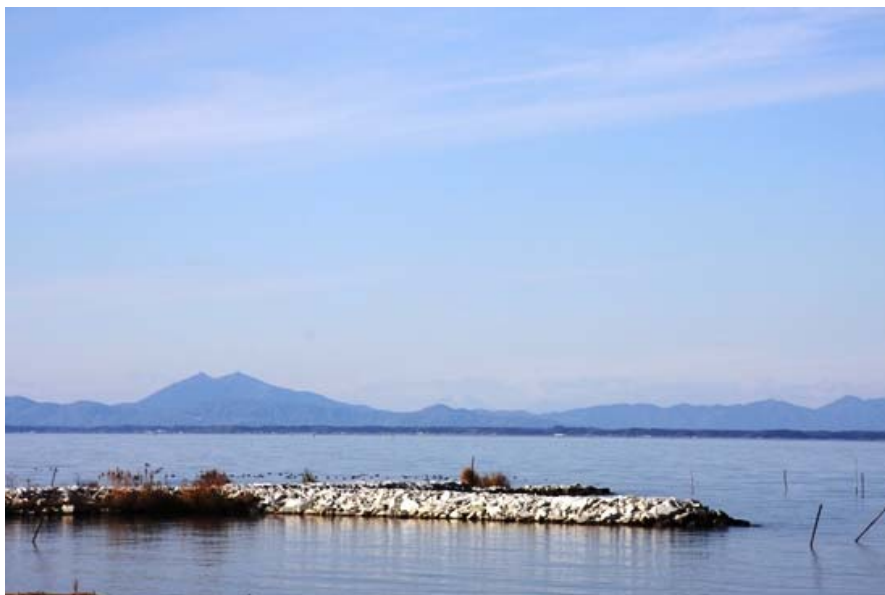


まほらに吹く風に乗って

<日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ>

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (8)

## 浮島・阿波に行く



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って  
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (8)

浮島・阿波を行く

木村 進

ふるさと“風”の会

(はじめに)

茨城県と千葉県の間には利根川があるが、安房国や海上国と常陸国の境域には昔の何かが残されていそうである。

常陸国風土記に「葦原の中津の国」とも記されているこの地方だが、大昔は流れ海・香取の海などと言われた大きな内海とそこに平和に暮らしていた縄文人がいた。

そこにはどんな景色が見えてくるのだろうか。

(目次)

(1) 茨城百景古渡の湖畔	.....	1
(2) 興禅寺 - 不許葦酒入山門	.....	6
(3) 景行天皇行在所跡 (お伊勢の台)	.....	9
(4) 浮島と製塩 (広畑貝塚)	.....	13
(5) 毘沙門堂 (馬渡：まわたり)	.....	18
(6) 大杉神社 (総本山)	.....	24
(7) 安穏寺 - 常陸坊海尊	.....	26
(8) 満願寺 (阿波崎)	.....	30
(9) 龍神蛇神	.....	35
(10) 永楽寺 (阿波崎)	.....	37
(11) 神宮寺	.....	40
(12) 神宮寺城跡	.....	45
(13) 高田神社	.....	49
(14) 逢善寺	.....	52
(15) 阿弥陀寺	.....	64
(16) 和田岬と和田公園 (浮島)	.....	67

## (1) 茨城百景古渡の湖畔

国道 125 号線は美浦村から稲敷市に入りしばらくすると小野川を渡る。この川岸の地名を古渡（ふっと）という。

さて、この「古渡」を「ふっと」読むのは難しいですね。

一緒に行った友人が北海道出身なのですが、この地名をみて「この漢字は当て字だな」というのです。「北海道にはたくさんこのような地名があり、大体見当がつく」と言います。

そこで、帰ってきて少し調べ始めたら、これもまたおもしろいのです。

ここは昔「古渡村」といい、霞ヶ浦の水運で江戸時代までは、非常に栄えていたところだといえます。

また、この古渡には昔からの「祇園祭り」があり、夜 8 時頃になって神輿が霞ヶ浦に入る湖渡御が行なわれる行事が行われていたといえます。しかし最近には夜に湖に入るのは危険なため、湖には入らずに水をかけあう行事に変わったそうです。

歴史をたどると「古渡城」なるものがあり、北条氏滅亡後、戦国時代末期に徳川家康が家臣の「山岡景久」に古渡 1 万石を与え、この景久が築城しました。その後、織田信長の家臣の丹羽長秀の子・長重が西軍に味方して所領を没収されていたが、1603 年にここ古渡（ふっと）1 万石で入ります。しかし、この丹羽氏は 1622 年に棚倉藩（福島県）に 5 万石で移ったため、古渡城は廃城となりました。今ではこの城の遺構はほとんどありません。

さて、この地名の由来ははっきりとはわかりません。しかし、この地は縄文人の住んでいた地であり、必ずこのような地名は縄文語（アイヌ語）が関係していると思われます。

「古渡」(ふっと)は、アイヌ語で「プット (p u t u)」に由来し、出口を指す言葉ではないかという考え方があります。

一方地形をみてみると、小野川が霞ヶ浦に注いでいる場所です。流れの出口となっていますので「ふっと」の「と」は「江戸」の「戸」と同じかもしれません。

また昔弥生人がここにいた原住民(縄文人)の首をフットフットとはねたのでついた名前だという言い伝えもあるようです。

また「信太古渡(しだふっと)」と書かれた地名もあります。昔のこの地は信太郡です。現在も、古渡の入り江は水路のように長く、景観がとても美しい場所で、霞ヶ浦湖岸でも一二を争うくらい美しい場所です。茨城百景に「古渡の湖畔」が選ばれています。

浮島に渡る手前の入り口としてこの古渡から紹介を始めましょう。



「茨城百景古渡の湖畔」の石碑



小野川河口あたりは昔の地形としては結構川幅が広がったと思われます。

この少し上流を「常陸国風土記」では「榎(え)の浦の津」といい「駅家(うまや)が置かれてゐる。伝駅使(はゆまづかひ)らは、この地に着くと、まづ口と手を洗ひ、東に向き直つて香島の大神(鹿島神宮)を遥拝し、そののちに国に入ることができる」(口訳・常陸国風土記)と書かれています。古東海道が霞ヶ浦を渡つたとしたら、「榎の浦の津」から小舟に乗りこの古渡からそのまま霞ヶ浦に漕ぎだして対岸に渡つたのかもしれませんが。高浜(石岡市)の湊にそのまま漕いで行けたのかもしれませんが。天気が悪く三叉沖(みつまたおき)が荒れた時は牛渡地区に上陸したのかもしれませんが。

古渡=ふっと、牛渡=うしわた ですから読みも難しいし奈良朝の頃の時代に何があったのか・・・

古に想いが行ってしまいます。



この緑の橋は旧道側の橋です。新しい橋のように感じます。

国道 125 号線からこの橋を渡って古渡の町に入ります。

この湖畔からも筑波山が良く見えます。

この古渡橋のところで管理区分が変わります。霞ヶ浦は国の管理、川は県の管理です。

流れはほとんどなく、どちらに流れているかわかりません。湖側から風が吹いてくるので川の表面はまるで逆に流れているように感じます。小舟が数隻つながれ、本当にのどかな風景です。

とても素晴らしいところです。

さて、この小野川の上流をたどると、2つに分かれ、一つは乙戸沼から流れている乙戸川であり、もうひとつは小野川の本流でつくば学園都市の松代辺りから流れてきています。





## (2) 興禅寺 - 不許葷酒入山門

古渡（ふと）の湖畔の近くに「興禅寺」という禅寺がある。古渡の町も国道がバイパスしてしまったせいか街中はひっそりとしていた。その旧道の間ほどに「延命地藏尊興禅寺」という看板を見つけたので奥まった寺の方に行ってみた。



お寺の入口に古びた山門が迎えてくれた。地震の影響かロープが張られて山門をくぐることが禁止されていたが、門の入口に「不許葷酒入山」と書かれていた。